

くらしに顔を出した

小さな動き、大きな動き

泉本 晋一



三年間自宅の居間を仕事場とし、公私混同の生活をしていたとき、自分の子どもや彼らの友だち、近所の子どもたちが家に遊びに来て、じかにいろいろな子どもたちと接する機会があった。と言っても子どもたちの立場からみれば、父親が家にいるというだけで構えてしまうのではないかと思っていたが、はじめのうちは緊張気味の子どもたちも、一度つかえ棒がはずれてしまうと、再び雷が落ちるまでは、言いたい放題、やりたい放題であ

った。

そんな子どもたちの姿を見ていたせいか、建築設計という職業柄か定かでないが、子どもの動きの中から二つのことについて考えるきっかけを得ました。

一つは「手の動き」について。もう一つは「家の中の動き」についてです。手の動きについてはよく言われることですが、ナイフで鉛筆をうまく削れないことや、はきものをそろえるという「しつけ」にもつながることで

すが、家の中の動きの問題は、住宅に限らずいろいろな建物や住環境全般にわたるテーマと言えるかもしれません。

いろいろな場に身を置いて生活し、成長していく子どもたちの「動き」には、住環境を考える上でたいへん重要なテーマが隠されているような気がします。

手の動きによる美意識と機能

日常生活の中で、毎日繰り返し返されている単純な作業や動作にも、たいへん重要な意味をもっているものがたくさんあります。例えば「靴をそろえる」「スリッパをそろえる」ということなどは、礼儀作法としても当然のことと思われるかもしれませんが、そこにはそろえる、という「手の動き」が、そろっているという「美意識」と、はきやすいという「機能」を発生させています。この手の動きと美意識と機能の関係をくらしの中できると、親が子に教える「しつけ」ということにも置き換えることができます。そしてこの手の動きが日常生活の

中で、人と人、人と物、人と場との関係に与える影響は、非常に大きいと言えます。

しかしながら大家族から小家族へと社会状況が変化し、家族単位の構成人数が少なくなるにつれて、家族の一人ひとりが自己を主張しやすくなった現状では、親子へと伝わっていく手の動きも減りつつあるように思えます。

例えばすまいの構成を考えると、家族の構成人数がそのまま部屋数を決定し、一人ひとりに個室が用意され、それらを並べただけで出来上っている住宅では、子供部屋が「隔離部屋」になっている場合が多いようです。そこでは子どもの個性を尊重し、自立心を高め、プライバシーを守るという大義名分のために、相互干渉が許されず、親でさえ立入ることができない無法状態が続くこともしばしばです。

子ども部屋があることによって、隠れることや隠すことにつながってはいないでしょうか。誰にも見られないことが、手の動きを止めさせ、親と子の手の動きによる

コミュニケーションを妨げる一因になっているのではないでしょう。強引な言い方かもしれませんが、見える、あるいは見せることが、手の動きの大切さを知ることになると思います。

また手の動きによるコミュニケーションの減少は、生活の中にも見ることができません。インスタント食品が浸透し、母親の手の動きすなわち料理の手順を見ることがなくなってしまうました。それにより、子供たちが台所でできた母親との交流や、食事を通しての会話も減ってしまいました。また手の動きが減ったことにより、台所で使う道具が機械化され、腕をふるうことも少なくなりました。また板の心地良い響きも聞こえなくなろうとしています。

便利さや合理性を求め続け、手の動きが減ってしまっただけ、生活の中身が薄くなり存在感のない形だけが残りました。

ものをつくるときだけでなく、それを使うときも、そしてかたづけるときも、手の動きが美意識と機能をつく

り出します。かたづいた後の整理された状態は、スッキリとした美しさや心地良さを感じさせ、また使いやすさをも兼ね備えています。とくに共有の場や共有のものに対しては、それが重要な役割を担うことになります。

家庭だけでなく、幼稚園や学校、隣り近所など、子どもたちをとりまく住環境の中で、手の動きのもつ意味がもっと真剣に考えられなくてはならないと思います。どんなに小さな手の動きでも、それがくらしに与える影響力はとても大きいのです。

家の中の動き——おにごっことかくれんぼ

一軒の住宅の中にもいろいろな動きがあります。家族一人ひとりの動きからはじまり、家族全員の動きや来客に対する動き、あるいは一日単位の動き、一週間、一ヶ月、一年単位の動きなど、それらのとらえ方によって、すまいの構成―間取りが変化します。

必要な部屋がただ並んでいるだけで、生活の場で繰りひろげられるいろいろな動きに対応した立体的な間取り

の構成がなされていなければ、毎日の動きに無駄が出たり、使い勝手が悪くなるだけでなく、雰囲気や落ち着きのある場をつくることもむずかしくなります。

動きと場の構成を考える上で、最近ではあまりみかけなくなってしまう子どもの遊びの中で、「おにごっこ」と「かくれんぼ」の動きをとり入れた構成が、一つのヒントを与えてくれます。

「おにごっこ」は、目で見える相手の動きをとらえ、追いかけてつかまえるまでのゲーム。「かくれんぼ」は、見えない相手を捜し出すという発見のおもしろさ、言い換えれば見え隠れのゲームといえるのではないでしょうか。この二つの遊びに共通しているのは、つかまえるまで、あるいは見つけ出すまで、オニは動き続けなければならぬという無限の展開がひろがることです。この連続的な動きの中で、自分と相手の位置を確認し、状況の変化に対応できた者だけが生き残れるわけです。

遊びを分析しすぎてしまいました。子どもの動きは、その子がどんな状況や場に置かれているかによって

大きく異なります。例えば行き止まりや全く隠れることができないところへ追い込まれてしまった場合、その子にとっては「死」を宣告されたも同然です。

家の中でも、接客などに対応する「表の動き」と、家族だけの「裏の動き」を考えることができます。表から裏へ、裏から表へとスムーズにつながる動きに遊びのエッセンスを加味すれば、いつまでも生き続けられる動きが約束されるのでしょうか。

くらしの中に顔を出す小さな動きも大きな動きも、各々が独立した動きではなく、そのとき、その場の変化に対応しながら動き続けるものです。これはその動きを起すものが人間であるからです。人の一生と同じような動き、その多感な時期の動きがどのようなものであったかによって、人生が変わります。いつまでも動き続けられるように、小さな動き、大きな動きをもう一度考え直してみたいと思います。

(龜建築デザイン)